

5 年 2 組

命つながるビオトープづくり



この「命」を引き継ぎたい

4月、教室にメダカがやってきました。きっかけは理科の授業で生物の学習をするためでした。Aさんは大喜びでした。「かわいい」「大切に世話しなくちゃ」と手をたたいて迎え入れました。Aさんだけでなく、クラス全体が夢中になっていきました。水づくりのこと、水草のこと、えさのこと…。夢中になっているからこそ、必死になって「命を守るため」に必要なことを調べたり、知っている友だちと共有したりしながら世話をしていきました。ある日、Aさんは「先生、死んじゃった」と切ない表情で声を掛けてきました。迎え入れたメダカが1匹死んでしまったのです。Aさんと友だち数人でお墓をつくることにしました。協力し、自然体験園の片隅にお墓ができたとき、Aさんは「苦しくないように、水をかけてあげなきゃ」と言いました。そして、授業が始まるからと先に教室に戻る私を背に、手を合わせ続けていました。そのことをクラスで話したり、その後も死んでしまったメダカをお墓に埋めたりしていく中で、Bさんが日記に「命を引き継ぎたい」と綴ってきました。Bさんは「命は引き継がれていく、メダカだって、人だって、植物だって同じ。卵を産んだり、種子となったり。人は不思議だよ。卵は産まないけど、赤ちゃんを産む」というような理科につながる話を聴いていたのでしょ、そのBさんの日記を紹介してから、子どもたちは、メダカの繁殖に思いを注ぎ始めました。まずは、オスとメスの見分け方を学び、オスとメスが一緒にいられる環境をつくりました。子どもたちは、オスとメスの数にも着目していきました。メスの取り合いをしてしまうのではないかな。オス1匹に対してメスが複数いた方がいいのではないかな。いろいろなことを話しながら、自分の飼育ケースで繁殖を始めました。子どもたちの努力の結果として、卵が次々と産まれていきました。毎朝「みんな！卵生まれた！」「本当？すごいすごい！」という歓声が飛び交うほどでした。Cさんは、一斉に卵が産まれたことに疑問を持ち、自分のメダカの観察記録を比較し、水温が関係しているのではないかと考えていきました。Cさんの予想通り、第二期の産卵期もどの飼育ケースも同じタイミングで訪れました。生まれた卵を顕微鏡でのぞいてみました。「先生、これが目？」「これが背骨？」「すごい、ちゃんと生きている」と、子どもたちは新たな命に感動していました。産卵の条件を考えていたCさんは、卵が孵化する条件も調べていました。温



度が関係していました。毎日温度をはかりながら観察を続けていました。そして、メダカの赤ちゃんが次々と生まれていきました。死んでしまったメダカの数と生まれてきた赤ちゃんの数を比較し、「確かに、減っていない」「引き継がれている」「増えている？」などと考察していく子どもたちでした。そして、子どもたちはメダカの命の連続をより自然な環境で実現したいと考えていきました。そして、自然体験園にある大池のように、メダカもほかの生き物も生き生きと暮らせるビオトープを、自分たちの手で一から作ってみようということになりました。

ここにはメダカさんを入れたくない

まずは、穴掘りから始めました。それぞれが本当に力を合わせて掘りました。スコップなどの道具に限りがあったので、手があく友だちもいました。すると、「じゃあ僕は、ここに目安になるロープを張るね」「わたしは、みんなが掘った土

をかきだすね」などと、ビオトープの完成に向けて協力しました。掘りながら、「ここには島をつくりたいね」「いいね、面白い」「島があるなら、橋はこのよう
にかけたらいいね」などとイメージを膨らませていきました。掘れた穴に水を
張ってみました。Dさんは「うわー。本当の池だ」「僕たち、またすごいものつく
っちゃったね」と感動していました。ヤギさんを飼育しているときの小屋づくり
をしたり、廃棄物を用いた商品開発では廃木材を加工したりと、ものづくりの
経験が豊富なDさんは、今までの学習をいかしてビオトープづくりにもアイデ
ィアを出しながら取り組んでいました。Dさんのように、今までの学習が生き
ていることが実感できる場面を大切にしながら活動したいなと思った場面で
した。水が張れた池をみんなで眺めていると、「いい感じ」「もう生き物がくら
せそうだね」という思いを語る子もいましたが、私がハッとさせられた言葉が
「ここにはメダカを入れたくない」という言葉です。メダカや他の生き物が共に
生き生きと暮すビオトープを目指して穴掘り続けてきましたが、子どもたち



は、出来上がったビオトープを見て立ち止まったの
です。「ここに入れることが、大切に世話をしてきたメ

ダカにとって本当にいいことなのかな」「ザリガニなどの肉食の生き物と一緒に入ると
食べられてしまう」「水が汚い。これじゃかわいそう」などの思いが語られていきました。大
切に世話をしてきたからこそその立ち止まりでした。話し合いを経て、子どもたちが出した答
えは、「メダカの住む環境とほかの生き物の住む場所を分ける」という答えでした。共に活
動していくと仲間と思いがずれていく。しかし、目標に向かってあきらめることなく、対話を
繰り返し乗り越えていく。そのような子どもたちの姿に、今日までの子どもたちが、友だちと
共に手を取り合っていく中で成長してきた実感をもてました。

住む場所を分ける 温度管理 に挑む

改良が必要な試作ビオトープには、メダカとほかの生き物を分ける以外にも、温度の課題がありました。
ある日、ビオトープで活動していると、メダカの産卵や卵の孵化に温度が関係していることを学んだEさん
が、「先生、ここすごく熱いよ。これじゃメダカが暮らせない」とつぶやきました。黒い防水シートで水を
ためている構造でしたので、太陽光で照らされ、高温となっていました。日よけのための屋根を付ける必要
性を感じていきました。

今後、大切に育てているメダカも他の生き物も生き生きと暮すビオトープになるまで、たくさんの課題が
ありそうです。一つ一つを乗り越えていく中に学びや成長を感じていきたいと思います。

